

Waldkindergarten – ein pädagogischer Ansatz – 森の幼稚園—教育的な試み—

佐藤 史浩¹
磯部 裕子¹

2010年2月、児童教育学科の海外研修において、ドイツのベルリン郊外パンコー地区にある森の幼稚園を訪問した。森の幼稚園とは、園舎を持たず一日の多くの時間を森で過ごすという保育を行っている園の総称である。したがって、その具体的実践は、実に多様である。今回訪問した園は、社団法人パンコー森の幼稚園 (Waldkindergarten Pankow e.V.) が運営している幼稚園で、園名を、「森を歩く人」(Die Waldläufer) としている。

ここで入手した資料 “Waldkindergarten – ein pädagogischer Ansatz” は、Die Waldläuferの教育実践の概要を示すものであるが、同時に世界にひろがる「森の幼稚園」の理念とその実践の意味を解説したものである。

本論では、資料の翻訳とともに、若干の考察を含めて論じる。デンマークの一人の母親の手によって始められたこの実践が、今日ドイツをはじめとした世界各国で広がりを見せているのはなぜなのか。園舎を持たず一日の多くの時間を森という自然の中で過ごすという実践は、ある意味近代学校(幼稚園)教育が蓄積してきた実践の対極である。森の幼稚園が提起する問題は、我が国においても、これまで自明視され続けてきた保育の空間論、環境論、カリキュラム論等の各テーマに、多くの示唆を与えるものである。

Keywords : 森の幼稚園 保育の環境 自然 経験

I はじめに：園の概要

Waldkindergarten Pankow e.V. は、ベルリン郊外に位置し、3歳から就学前までの園児が在園する園である。在園児は十数名で、教師は3名である。

園舎は、子どもたちが朝と帰りのわずかな時間を過ごすための小さな小屋が用意されているだけで、ドイツ国内に限らず各国の森の幼稚園がそうであるように、園生活の多くは、森で過ごす。本園の森はベルリン市の所有地であるが、園が自由に使用することが許されている。

森までのルートは3つあり、その日の気候や子どもたちの関心によってルートが決定され、子どもたちが森に入っていく。森での遊びは、子どもたちに任されていて、教師は子どもたちの興味や

関心を観察しながら、必要な援助をする。本園では、現在のところ、保育は午前のみ行われており、午後の保育が必要な場合は、近隣の通常の幼稚園と連携して実践されている。

以下に、本園の概要書を翻訳し、掲載する。

II “Waldkindergarten – ein pädagogischer Ansatz” 森の幼稚園—教育的な試み—

1. 歴史的背景

森の幼稚園が誕生するきっかけとなったのは、デンマークの一人の母親 (Ella Flatau) である。彼女は、毎日、自分の子どもたちを連れて森に出かけ、そこで自由に遊ばせていた。それは1952年のことであった。

その後1970年代の初めごろから、スカンディ

1 宮城学院女子大学

ナヴィア諸国において森の幼稚園が創設されることになった。

ドイツにおいて森の幼稚園が最初に当局によって設立許可を受けたのは、1968年の春であったが、公的な財政支援はなく、もっぱら親からの保育料によって運営されなければならなかった。

1993年、フレンスブルクで初めて正式な認可を受けたことにより、90年代に森の幼稚園の設立ブームが起こった。今日、ドイツにはおよそ350の森の幼稚園がある。部分的に森の幼稚園の理念を取り入れたものを含めるなら、その数はおよそ700にのぼる。

2. 森の幼稚園の類型

◆典型的な森の幼稚園

子どもたちは週の5日間、毎日4時間から6時間を一定範囲の自然のなかで過ごす。こうした幼稚園のなかには、午後もさらに保育をおこなうところもあり、その数は増えている。

各園には頑丈につくられた建物はないが、極端な気象条件に備えて、避難場所（コンテナ、小屋、テント）が用意されている。たいていの場合、子どもたちの数は、3歳から6歳までのおよそ20名であり、保育者の数は2名ないし3名である。

◆森の幼稚園のコンセプトを取り入れた幼稚園

これは、通常の幼稚園のなかに森の幼稚園のコンセプトを取り入れたものである（デンマークでは広く普及しているが、ドイツではこれまではあまり見ることができない）。

こうした園では、その日によって森に出かける子どもたちを決めたり、子どもたちをグループに分け、週もしくは月交代で森へ出かけたりしている。

◆森の幼稚園と通常の幼稚園の連携

午前中は自然のなかで過ごし、午後は通常の保育を受けるものである。

さらに広い意味では、プロジェクト週間として

森のなかに出かけたり、定期的に森での保育を行う幼稚園も、森の幼稚園の類型ととらえることができる。

3. 基本理念と目標、方法論

◆基本理念と目標

- ・森の幼稚園は、壁のない幼稚園であり、自然は遊びの空間、経験の空間、そして学習の空間である。
- ・森の幼稚園は、ますます屋内で過ごすことが多くなっている幼児期、その結果としての運動不足やメディア漬けの生活に対する代案である。
- ・森の幼稚園は、自然に対し疎遠となった現代への代案でもある。つまり、自然環境に対する深く畏敬に満ちた関係を取り戻すことをめざした実践である。
- ・自然のなかで過ごすことによって、身体や心を健康にする。
- ・すべての感覚や身体を使って知覚し、静寂を味わう。
- ・多彩な素材を使って創造力や空想力を高める。
- ・植物、動物、循環現象、生態的なつながりなど豊富な機会をとらえて、じかに自然について学習する。
- ・物理的な力を用いることなく身体の限界を知る。
- ・冒険心を養い、みずから体験するなどの実践が可能となる。

◆方法論

- ・自然は教育者である。
- ・空間的な制限を設けず、運動を妨げない。
- ・ゆっくりと過ごし、そして瞑想する時間を設ける。
- ・観察し、調査し、探究し、そして実験する。
- ・出来合いの遊び道具を使わない。
- ・活動に決まりを設けない。
- ・子どもたちがあらゆる生活場面において、自分で決定したり、協同で決定したりする。
- ・自由な遊びが中心となる。
- ・保育者からの的確な言葉がけを通して、子ども

たちに好奇心を持ち続けさせる。

- ・共同生活に必要な仕事に子どもたちを参加させる（薪を集める、食事を用意するなど）。
- ・自然と共生する人々の暮らしに学ぶ。

4. 人間像

- ・人間は自然の一部である。
- ・自然に触れ合うことは、自然的存在である人間の基本的な欲求であり、基本的な権利である。
- ・人間は自然から学ぶことができる。
- ・人間は、自分自身に、共同体に、そして自然界に責任を負っている。
- ・人間はみずから成長していく。しかし、成長の歩みや道のりは人それぞれである。
- ・人間は信頼されているときに強さを発揮する。
- ・あらゆる人間や生きものは愛され、畏敬の念もたれ、そして尊重されなければならない。

5. 保育者の役割

- ・保育者は、率先して自然に対して深い情緒的な愛着をもつが、それは責任を強く自覚したものでなければならない。同時に保育者は、文明に親しんだ習慣とも惜別する。
- ・保育者は自然のなかの生活空間や天候について幅広い知識を持ち、危険を察知できなければならない。
- ・保育者は、持続可能性の原則を幼稚園の日常に取り入れる。
- ・保育者は、子どもたち一人ひとりの成長や学習の過程に付き添うが、同時に、彼ら自身が常に疑問を持ち、学習する。
- ・保育者は、注意深い観察者であり、刺激し共感する人であり、また、遊び仲間であり、話し相手でもある。
- ・保育者は、子どもたちが身体の欲求に気を配るように仕向ける（天候にふさわしい服装、森のなかでの排泄、体によい食べ物、清潔）。

6. 空間と素材の役割

◆空間

- ・自然は壁のない空間である。それは、子どもたちにとって、自発的に、そして自由にふるまうことのできる空間である。自然は理想的な遊び空間であり、そこには遊びの機会が無尽蔵にある。
- ・幼稚園は、子どもにとって、家庭の次にさまざまな経験をする場である。森の幼稚園の子どもたちが会える森は、わが家、つまりよく慣れ親しんだ場所である。彼らは森を発見し、探究する。彼らは森のなかで、自分たちがどこにいるのかを学ぶ。
- ・自然はリフレッシュしたい気持ちを起こさせてくれる。しかし、自然は私たちにさまざまな挑戦をも突きつける。自然は、日一日と変化していく。そのなかで子どもたちは天候や、自然界に見られる循環現象（季節、生成と消滅、捕食するものと捕食されるものなど）を間近で体験する。
- ・自然は、保育者が構造化できない空間であり、そこにはあらかじめ作りあげられたものはなにもない。したがって、一つひとつのことに意味づけをすることが可能であり、また不可欠でもある。
- ・子どもたちは森のなかで、広い狭い、明るい暗い、寒い暖かい、湿り乾きを体験し、さらに色、形、におい、物音には多様なものがあることを体験する。

◆素材

- ・森の幼稚園では子どもたちは、自然が提供するものを用いて遊ぶ。小さな木、石、木の葉、草、どんぐり、松かさ、樹皮、カタツムリの殻などがそうである。これらのものすべてには、あらかじめ決められた遊び方はない。自力でやってみたくなるもの、つまりいろいろ試しながら、遊び方を見つけようという気を起こさせてくれるものばかりである。
- ・子どもたちは、自分なりのイメージをふくらま

せる。小さな木は電気ドリルになり、そのちょっと後には、魚に見立てた葉っぱを釣る釣り竿にもなるかもしれない。昨日、子どもたちを乗せて月に向かうロケットに使われた木の枝は、今日は怖いワニにもなる。

- ・こうした自然の素材のほかに、工具（ナイフ、のこぎり、ハンマーなど）、スコップ、バケツ、ロープ、布切れ、毛布、虫めがね、双眼鏡、必要な本なども用意されており、それらはタマネギ運搬車に積まれて森のなかへ運ばれる。
- ・避難場所には、たいてい、本、お絵かき道具、楽器、釘、ねじ、木くず、そして工作に必要な用具なども置かれている。

7. 森の幼稚園とベルリンの教育計画

ベルリンの教育計画が考える教育は、森の幼稚園にとって歓迎されるものである。そこでは、教育は、本質的には自分自身で組織化する過程であるとされ、このためには刺激に満ちた環境が必要とされているからである。

自然は、もっとも刺激に富んだ学習環境である。そこでは子どもたちは、彼らが必要とする学習経験をすることができる。

森の幼稚園では子どもたちは、あらゆる教育活動を通して、自我、社会的な能力を伸ばし、事物に関する知識や学習の方法を学ぶことができる。

（森の幼稚園の子どもたちが、平均以上の社会的な能力、問題解決能力、争いごとの調停能力、そして創造的な能力を示していることについては、以下の9. で挙げられているペーター・ヘフナー（Peter Häfner）の研究成果も参照のこと）

◆身体、運動、健康

子どもたちは、さまざまな地形や土壌のもとで、いろいろな運動を制約を受けることなく自由におこなう。こうした「基本となる要素の多様性」が、複雑な運動能力とその調和を助長すると同時に、また森での生活はそれを必要としている。

子どもたちは、自分自身の身体を知るようになり、身体がもつ力に気付く。

子どもたちは、森のなかで自分たちがどこにいるのかを学び、危険なことから身を守る練習もする。

感覚を使ってさまざまな経験をすることや、運動をすることは、認識の発達を促す。

森のなかで過ごすことによって免疫システムが強化され、精神の調和が作りだされる。

森に住む動物、果実、そして草は、健康によい食べ物と持続可能性を守るために、大切なものである。

◆社会的、文化的環境

森の幼稚園は、通常は、親のイニシアチブによって設けられた教育施設である。このために、家庭と保育者との間には強い結束がある。子どもたちは、親が幼稚園のためにいっしょになって活動し、お祭りや森のなかでの集会に参加するのを日々見聞きしながら、共同体感情を身につけていく。

森にいるのは子どもたちだけではない。子どもたちは営林職員、林業従事者、猟師、さらには自然保護に携わる人たちと知り合い、ジョギング、散歩、乗馬などのため近隣からやってくる人々と出会い、話しをする。

◆コミュニケーション：言葉、文字文化、メディア

既成の遊び道具がないため、なにをするにしてもその意味づけをめぐって話し合いが必要である。

自然がもつ多様性に促されて、子どもたちはものごとを創造的に、また想像豊かに、そして情緒的に表現しようとする。このことによって子どもたちは、語彙を幅広く身につける。また、子どもたちは静けさを味わうことで、動物の声や風の音に耳を澄ますこともできる。

森のなかで見かけるさまざまな痕跡を読み取ることは、書いたり、読んだりする能力を伸ばす。つまり、「一見しただけでは、ほとんど区別されることのできないもの（痕跡あるいは文字）は、並べて比較することによってもっと理解を深めることができる。そのときに痕跡は、ゆっくりとで

はあるが、ますます多くの内容と意味をもつようになる。地面のうえに残された小さな痕跡の背後には、全体的な物語が隠されているのである。」(Barucker, 2008)

◆工作

子どもたちは、自然の素材を使って、そのとき限りのものを作り上げる。その際に、彼らはいろいろな素材の見かけの性質を感じ取り、いろいろな形や色を見分け、さらに素材の本質をかすかにではあるが感じ取ることができる。たとえば、木の葉、石、あるいは小枝を使って、地面に渦巻きを描く。

子どもたちは、どのカタツムリの殻も、どの石も、またどのチョウも、それぞれが比べものがないほど美しいことに気づく。

木は、ふんだんに使え、ナイフで何かを作ろうという気分をくり返し起こさせてくれる素材である。

子どもたちは、木の葉や花を使っても絵をかくことができることを発見し、石をすりつぶして色のついた粉にする。

自分の手を通じて、子どもたちは、粘土や土のような可塑性を持った素材に創造的に親しむようになる。

木を使って何かを作るとき、子どもたちは、いろいろな木の特性、たとえば、かたい、やわらかい、しなやか、もろいといったことを発見する。たとえば、弓を作るとき、小屋を作るとき、あるいは自分たちのお城のためにはしごを作るとき、どのような木が適しているか、子どもたちはそれを試してみる。

◆音楽

子どもたちは、閉ざされた空間に比べ野外では、歌声も開放的に伸び伸びと広がることを経験する。

子どもたちは、自然の素材から簡単な楽器を作る。たとえば、カタツムリの殻からはがらから、木からは音の鳴るおもちゃを作る。

自然は音であふれている。鳥の鳴き声、木の葉

のカサカサ鳴る音、雨のパラパラ降る音、遠雷のとどろき、水のピチャピチャする音、火がパチパチ燃える音などがそうである。

◆算数に関わる基礎的な経験

自然のなかで過ごしていくうちに、子どもたちは自分がいまどこにいるかを知るようになる。彼らは距離の観念を身につけ、目的地とそこまでの時間とを結びつけて考えるようになる。子どもたちは、自分の位置を知るうえで、方位が助けになることを知っている。

自然は数を数えたり、ものを比べたりするたくさんの機会を与えてくれる。たとえば、池にいるカモには何匹のひながいるか、カブトムシには何本の足があるか、花には花びらが何枚あるか、どの木が高いか、どの動物が速いか、どの鳥の羽が長いかなど。子どもたちは、自然のなかにはいろいろな形をしたものがあることを発見する。たとえば、丸い形をしたネズミの巣穴、角ばった形の茎、卵の形をした葉っぱ、星の形をした花などがそうである。

◆自然科学や技術に関わる基礎的な経験

子どもたちは、動物、木、花、草、そして石と出会う。日々彼らは、野外で自然の力に身をさらしている。子どもたちは、大地、火、水、そして空気が生命の基本的な基盤となっていることを身体を通して知る。それらの性質を見つけ出すことに、彼らは喜びを感じる。子どもたちは、そうした性質に風情や色彩を結びつける。

動物、植物、そして石は、子どもたちの身近な存在であり、そこから、たくさんの疑問が生まれる。イラクサの丸まった葉っぱのなかには何が隠れているのか、白樺の樹皮はなぜよく燃えるのか、この足跡はどの動物のものか、トガリネズミはなぜ死んだのかなど。

日々、子どもたちは、水や食物の循環、あるいは植生や繁殖のサイクルといった現象のひとつに出会うことができる。こうしたことが、子どもたちの好奇心を呼び起こす。

子どもたちは、時間とともに影が変わることを

体験し、それが太陽の動きや時間の経過と関係があることを理解する。

子どもたちは、松ぼっくりが同じ大きさの石よりも軽いことを体験する。

しかし、文化に関連した能力や技能、たとえば鉛筆を持ち書くといった、ある種の繊細な動きを伴った技能を子どもたちに伝える点では、たいいてい、通常の幼稚園のほうが森の幼稚園よりも優れている。

8. 特色

たいいていの森の幼稚園は、親たちが運営団体を設立し、そのイニシアチブのもとで誕生した。(いまでは、地方自治体や運営団体の連合組織も運営するようになっている。)

通常、3歳からの子どもを対象に、半日の保育を行う。

子どもの数は、10名から20名の間である。

親と保育者は、通常の幼稚園以上に運営に参加し、すべての関係者の間に緊密なつながりがある。

保育水準は、たいいてい通常の幼稚園以上のものとなっている。そのわりには、経常費はしばしば少ないものとなっている。建物や遊具、また設備にお金をかける必要がないからである。

子どもたちには、決められた服装をし、決められたものを携行することが求められる。

◆森の幼稚園を設立する際に考慮すべきこと

森の幼稚園の設立のための全国統一の規定は存在しない。設立許可の権限は州の青少年局がもっており、そこから、以下のような州の指導要綱に関する情報を入手することができる。

- ・森の幼稚園に義務づけられているものとして、保健衛生対策との関連で健康管理、事故に備えての準備、および避難小屋の設置がある。
- ・子どもの最大限の人数は、多くの場合15人ないし20人に制限されている。
- ・必要とされる保育者の人数と資格は、州によって少しずつ異なっている。

- ・森林の使用許可を営林署もしくは環境局から受けなければならない。
- ・正式に認可されると、森の幼稚園は、通常の幼稚園と同じ程度の補助金の交付を受けることができる。

9. 森の幼稚園の卒園児

【調査】

ヘフナー (Häfner) は、2002年の学位論文のなかで、以下の疑問を解明するための調査をおこなっている。

○就学前教育の場として森の幼稚園に通った子どもたちは、通常の幼稚園に通った子どもたちとまったく同じくらい、小学校に向けた準備を受けているのか？

○森の幼稚園に通った子どもが小学校に入学したとき、問題が生じることがあるのか？

八つの州の第1学年担当の教師103名に、森の幼稚園出身の子どもたちの以下の分野での状況について、文書による質問をおこなった。

- ・動機づけ・根気・集中
- ・社会的態度
- ・授業への参加
- ・美的な分野
- ・認識の分野
- ・身体の分野

【結果】

動機づけ、集中、そして根気の面で、森の幼稚園に通った子どもたちは、通常の幼稚園に通った子どもたちよりも、優れたものを持っている。

森の幼稚園に通った子どもたちは、通常の幼稚園に通った子どもたちよりも高い社会的能力をもっている。

森の幼稚園に通った子どもたちは、通常の幼稚園に通った子どもたちに比べ、授業により意欲的に参加する。

授業のなかで、森の幼稚園に通った子どもたちは、ほかの子どもたちに比べ、はるかに豊かな創造力や空想力を発揮する。このことは、とりわけ音楽や工作の時間にはっきりとあらわれる。

手先の器用さのような精確な動きを必要とする技能の面で、また書き方の授業でも、通常の幼稚園出身の子どもたちのほうが評価されているが、その差は微々たるものである。

森の幼稚園に通った子どもたちは、授業中、出された問題を上手に処理し、読み方の学習においても、通常の幼稚園に通った子どもたちよりも優れている。そのほか、認識の分野では、著しい相違は存在しない。

原則的には、森の幼稚園の子どもたちが高い評価を受けるのは、スポーツの分野である。校舎内での方向感覚も、彼らのほうが勝っている。

けれども、リズムを大きく乱さずに運動することにおいては、通常の幼稚園の子どもたちのほうが、森の幼稚園の子どもたちよりも、いくらかではあるが勝っている。(森のなかでは、子どもたちは指示を受けることなく、伸び伸びと運動をするが、これとは反対に、通常の幼稚園では、子どもたちは指導を受けながら一斉に運動をおこなう。このことがもたらす練習効果が、その理由であるように思われる。)

森の幼稚園に通った子どもたちは、教室で「おとなしく座っている」ことができるが、通常の幼稚園に通った子どもたちよりもずっと勝っているとは言えない。

森の幼稚園に通った子どもたちは、通常の幼稚園に通った子どもたちに比べ、ほかの子どもたちと協力しながら活動する。

森の幼稚園の子どもたちは、通常の幼稚園の子どもたちに比べ、事実教授⁽¹⁾の授業で明らかに高い評価を受けている。

森の幼稚園に通った子どもたちは、通常の幼稚園に通った子どもたちに比べ、子ども同士の争いごとをずっと穏便に解決することができる。

「子どもたちは、通常の幼稚園よりも森の幼稚園から、多くの分野でたくさんの有益なことを学んでいる。」

園から、多くの分野でたくさんの有益なことを学んでいる。」

10. 参考文献

- Barucker, Bastian(2008): Die warme Decke aus Schnee-oder mehr über das Spuren-
lesen. Unveröff. Manuskript Berlin
- Bickel, Kirsten(2001): Der Waldkindergarten.
Cornell, Joseph(2006): Mit Cornell die Natur erleben. Naturerfahrungsspiele für Kinder und Jugendliche. Mülheim an der Ruhr
- Häfner, Peter(2002): Natur- und Waldkindergärten in Deutschland – eine Alternative zum Regelkindergarten in der vorschulischen Erziehung. Diss. Uni Heidelberg
http://archiv.ub.uni-heidelberg.de/volltextserver/volltexte/2003/3135/pdf/Doktorarbeit_Peter_Haefner.pdf
- Kalff, Michael u.a.(2001): Handbuch zur Natur- und Umweltpädagogik. Theoretische Grundlegung und praktische Anleitungen für ein tieferes Mitweltverständnis. Tuningen
- Miklitz, Ingrid(2005): Der Waldkindergarten. Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes. 3. akt. und erw. Aufl., Weinheim und Basel
- Schäfer, Gerd E. u.a.(2009): Natur als Werkstatt. Weimar, Berlin
- Young, Jon u.a.(2008): Coyote's Guide to Connecting with Nature. For Kids of all ages and their Mentors. Shelton
- <ウェブサイト>
- Bundesverband der Natur- und Waldkindergärten in Deutschland:
<http://www.waldkinder.de/Schutzgemeinschaft>
- Deutscher Wald:
<http://www.sdw.de/projekte/waldkindergaerten/>

訳注

(1) 社会、地理、理科、交通教育、性教育などの分野を含んだ統合教科

(翻訳：佐藤史浩)



Ⅲ 考察

「森の幼稚園」の実践は、フレーベル以来構築されてきた幼稚園の対極的な実践であるともいえる。にも拘わらず、今日、世界的な広がりを見ているのはなぜなのだろうか。それは、この実践が、今日先進各国が抱えている幼児教育の課題に対するある種の問題を提起しているからである。

ここでは、提起されている問題を整理し簡単な考察を述べてみたい。

第一に、教育空間への問いである。森の幼稚園は、教育空間としての園舎及び園庭を持たない。

幼稚園の創始者であるフレーベルは、それまでの幼児教育機関として普及しつつあった幼児学校を批判し、幼児の庭としての Kindergarten を構想した。それは、学校（いわゆる近代学校）とは異なるあらたな幼児教育空間の提案であった。

フレーベルは、幼児が自然（庭）の中で生活することの意味を主張し、Kindergarten を提案したが、それは「教師によって創られた自然」であった。

その後、世界各地に広がった幼稚園は、その普及と共に、フレーベルが描いた保育の空間デザインから、近代学校のそれに近いものへと変容して

いった。我が国の幼稚園は、特にその傾向が顕著であり、各地に「小さな小学校」あるいは「幼稚な小学校」としての幼稚園が乱立し、今日に至っている。

フーコーがパノプティコンと指摘した近代学校の空間は、近代の教育内容の実現に大きく寄与したことは、先行研究が繰り返し指摘しているとおりである。⁽¹⁾ 幼稚園空間が小さな小学校化されれば、その教育方法も教師と子どもの関係も教育内容も、すべて学校化することになる。

わが国の幼児教育は、「遊びを中心とした環境による保育」を基本テーゼとし、むしろ小学校教育とは先の点において、異なることを主張し続けてきているが、学校化している実践も決して少ない。

「森の幼稚園」は、近代学校化した幼稚園の空間を再考するうえで、一つの問題提起をしている。なぜなら、その環境は、教師が創りだした自然（庭）ではなく「自然（森）」そのものであるからである。

第二に、空間論の転換によって、当然のことながら、教育内容つまりカリキュラム論の再考を促すことにもなる。我が国の幼児教育は、基本的に PDCA サイクルの中で実践されてきた。それらの主体は基本的に実践者である教師である。すなわち、実践は、教師が計画し（Plan）、実践し（Do）、評価し（Check）、改善する（Action）とされてきた。幼児教育においても、教育課程表に基づき、年間計画が作成され、続いて月案、週案が立案される。それらを作成するのは、他ならぬ教師自身であり、その計画に基づいて実践することが、多くの園の日常となっている。

しかし、こうした教師が事前に作成した計画に従って、自由な遊びを中心とした保育が実践されることには、矛盾がないわけではない。これまでもこの点は、様々な研究者が指摘し続けてきたところである。しかし、我々は、これを乗り越えるカリキュラム論を展開できずにきた。

人が計画することのできない自然の森をフィールドとし、教師の計画をいとも簡単に乗り越える

幼児自身に向き合う生活を通して「教育」しようとする「森の幼稚園」の試みは、これまで我々が自明視してきた実践の構造—教師が主体となるPDCA—と「教育する存在」としての教師の役割にも再考を迫るものといえるだろう。

第三に、学びの転換である。森で生活する子どもたちが日々出会う事柄は、基礎から応用へと展開するわけでもなく、子どもたちの発達段階に配慮されるわけでもなく、権力によって選択された教育内容でもない。それらは、系統性や発達段階を無視し、子どもの前に立ち現れる。

子どもたちが興味を抱き、夢中になる世界は、予測不可能であるが、子ども自身が、森で出会ったモノ・コトに興味・関心を抱けば、子どもは、自身の力でそれをどこまでも探求し、挑戦する自由を保障される。

教師は、そこで子どもに知を伝達するのではなく、子どもの学びを支える援助者となる。こうした体験は、小学校以上の学習を「先取りした準備」とはならないが、子どもの、「学びの体験」となる。

このような invisible な教育は、言語化することが困難であり、理解されにくい。そこで、とかく、その後の子どもの成長に対する不安や学校生活への適応について、保護者は不安を抱きがちである。

ヘフナーの研究成果⁽²⁾は、森の幼稚園での「学びの体験」の成果を実証的に示しているともいえるだろう。幼児期の教育の意味を再確認できる貴重な資料でもある。

IV おわりに

今回訪問した森の幼稚園 “Die Waldläufer” は、小さな小屋を持ってはいるが、毎日、森にかける実践を行っているという点において、「典型的な森の幼稚園」に分類される。訪問した日は、2月でもあり、森の中は、雪がたくさん積もっていたが、子どもたちはいつものように森にでかけ、午前中の時間をそこで過ごした。

昨日同様、雪化粧した木に登ることに挑戦す

る子、きつねの穴を見つけて興味深く中を探る子、それについて説明する教師の話に聞き入る子、その話しに促されて思わず歌い出す子、雪の坂道を転げる遊びを繰り返す子、動物の足跡を指さし、動物を予測したりその住処を探しあてる子等々、子どもたちのその日の関心は実に多様であった。教師は、そのひとつひとつ向き合いながら、子どもそれぞれの学びを支援していた。どの子どもの体験も、ある程度は教師に予想できていたが、計画はされていない。

わが国においても「森の幼稚園」の試みは、少しずつではあるが、全国各地に広がりを見せている。未だ認可された園は数少ないが、ドイツにおいても「森の幼稚園のコンセプトを取り入れた幼稚園」が増えているように、「森の幼稚園」の実践をそのまま取り入れるのではなくとも、この理念に学び、実践を再考している園は増えつつある。それは、これまで我々が自明視してきた幼稚園の空間、環境、そしてカリキュラムについての諸課題を見直す上で、「森の幼稚園」の提起する問題は、極めて示唆的であるからである。

教師によって作られた自然の中で、教師によって計画された保育内容を進める実践は、もはや再考すべき時が来ているといってもよい。わが国の風土や習慣、文化や自然にあった幼児教育のあり方とは何なのか。森の幼稚園の問題提起を受けて、更なる考察を深めて行きたい。

註

- (1) パノプティコンについては、ミッシェル・フーコー／田村俣訳『監獄の誕生：監視と処罰』新潮社 1977 参照。学校空間論の関係については、磯部裕子・青木久子『脱学校化社会の教育』萌文書林 2009 において論じている。
- (2) ヘフナーの研究成果については、佐藤竺によって翻訳されているので参照されたい。ペーター・ヘフナー／佐藤竺訳『ドイツの自然・森の幼稚園—就学前教育における正規の幼稚園の代替物—』公人社 2009